

スペインのバリアドリード大学への訪問記

上野 雄史（静岡県立大学経営情報学部准教授）

はじめに

新型コロナ禍において、海外に行きたくても行けない……。そんなモヤモヤでストレスを抱えている方が多いのではないのでしょうか。かくいう私もその一人です。国内、海外の学会も含めてほとんどオンラインで行われるようになっていきます。私個人としては移動しないのは楽でよいと思う反面、人とのリアルな出会いを求めたくなる最近です。

この紙面をお借りして 2019 年 9 月に訪問したスペイン・バリアドリードの話を書きます。スペインのバリアドリード大学は、本学の提携校で、国際交流の一環で訪問しました。出発日は、9 月 10 日。あの台風 15 号の中で出発することになりました。台風により陸の孤島と化していた成田空港に到着したのが 15 時過ぎ。フライトは 12 時だったのですが、大幅に遅延。その日のフライトは何と夜の 21 時となりました。今思えばよく飛んだもんだと…思いました。

トラブル続きの道中

マドリードの空港についたのは明け方。そこから移動し、バリアドリードに向かうためにチャマルティン駅前のホテルに一旦滞在しました。へとへとに疲れていたのでも、少しでも体を休めようと思ったわけです。しかし、この判断が悪夢のようなトラブルを呼ぶこととなります。

フロントで待っていた際に、初老の女性に声を掛けられ、対応している間に足元に置いていた荷物が無くなっていました。

何とも間抜けな話ですが、まさかホテルのフロントで、かつ足元に置いてある荷物をあのような形で盗る人がいるとは……。正直驚きました。ちなみに、声をかけてきた初老の女性の姿が気づいたときには消えていました。

幸いなことに保険に入っていましたのでお金で補填されましたが、鞆の中には大事にしていた私物も多くありましたのでショックでした。それに追い打ちをかけるように、盗難の証明書を取るのに苦労するなど……。最初からすったんもんだでした。

不幸中の幸いで、パスポート、現金・カード類は身に付けており、現地にスペイン語が話せる同僚がいました。同僚の助けがなければ、現地で盗難証明書を取ることはできなかったでしょう。

そう！スペインは英語が通じません。正確には通じる人が少ないです。ホテルはともかく警察署、駅などの公的機関ではまず通じません。これはマドリードでも同じです。なので、スペインに行く人はスペイン語を片言でもマスターしておくこと、スペイン語が話せる人の助けが借りることも想定しておくことよいでしょう。くれぐれも現地に行ったら何とかなる……。と思わないことをお勧めします。

最初から前途多難な始まりですが、「もう失うものは何もない！」ということで、マ

ドリードからアベ（AVE スペイン高速鉄道）に乗り 1 時間半ほどかけてバリャドリードに向かいました。

カスティーリャ王国の首都バリャドリード

バリャドリードは、カスティーリャ・イ・レオン州の州都で、人口は 30 万人ほどです。ヨーロッパの中規模の都市といってよいでしょう。街のシンボルである大聖堂、マヨール広場に行くともまるで中世の世界にタイムスリップしたかのような感覚になります、と言いたいところなのですが、滞在期間中はお祭りの期間ということでにぎやかでした。



<広場のステージでイベントが行われてました>

滞在期間中は街並みをゆっくり楽しむ、というよりはお祭りを楽しむ時間だったように思います。なにせ、現地のお祭りは一週間も続き、日中から夜まで続きます。皆さん、平日の昼から飲んで食べて楽しげにやっているの、私たち（日本人）は働きすぎているのではないか・・・と感じます。しかも出店で食べる料理とビール、ワインは絶品です。これが一週間続いている訳ですからたまりません。



<昼間から飲んでいる人たち、仕事は？>

ここでスペイン・バリャドリードに関する簡単な紹介をしておきます。スペインは政

治体制としては議会君主制を取っており、象徴君主である国王がいます。スペイン王家と日本の皇室とも親交が厚く、2017年にはフェリペ6世国王夫妻が訪日されました。

スペインの原型となる、スペイン王国はイベリア半島中央を支配していたカスティーリャ王国と同半島東部を支配していたアラゴン・カタルーニャ連合王国の統合により1479年に誕生しました。

現在のスペインの首都マドリードもカスティーリャ王国領域内にあります。一方で、アラゴン・カタルーニャ連合国内にあるのがバルセロナです。こう考えると、カタルーニャ地域で起こる独立運動の背景が理解できてくるのではないのでしょうか。

コロンブスを支援したイサベル1世は、カスティーリャ王国の女王です。イサベル1世はアラゴン・カタルーニャ連合王国の王子フェルナンドと結婚し、両国が統合されました。イザベル1世とフェルナンドが1469年に結婚式をあげたのがバリャドリードです。なので、スペイン王国誕生の地といってもよいでしょう。

なお、コロンブスはバリャドリードで没したと言われ、当地にはコロンブス博物館もあります。ドン・キホーテの作者セルバンテスもバリャドリードに住んでいました。その家が博物館「セルバンテスの家」となっています。カスティーリャ王国の首都であったバリャドリードには多くの知識人、冒険家の足跡が残っています。

バリャドリード大学

訪問したバリャドリード大学は1239年に創立されたスペイン最古の大学のひとつです。現在は、バリャドリード、パレンシア、ソリア、セゴビアの4つのキャンパスを持ち、幅広い専門分野をカバーしています。学生数は3万人を越え、教員は2千人ほどです。現在、100の学士課程、54の修士課程、80の博士課程が設置されています。大学所属の「アジア研究所」(Centro de Estudios de Asia)では日本をはじめとしたアジア地域の研究がおこなわれており、学生に対しては講演会、ワークショップを定期的に提供しています。



今回は、現地で講義を行うことはなく、交流を主目的とした訪問だったのですが、非常に濃密な時間を過ごすことが出来ました。おおよそこうしたスケジュールでした。

『軽くお茶をしながら打ち合わせ→お昼ご飯を食べながら打ち合わせ→その後、オフィスに戻って打ち合わせ』

雑談 80%ぐらいだったような気がします。今のオンラインで失われている部分、い

わゆる冗長な部分を大切にするのがスペインの文化といってもよいかもしれません。

シエスタというお昼休みが 13 時–16 時と長く、飲食店を除いたお店は 16 時、17 時頃にボチボチと開き始めます。夏季は日が長く 21 時ぐらいまで明るいので、子供も公園で遊んでいる姿を見かけます。日本と全く生活リズムが異なります。ところ変われば、スタイルが変わります。なお、日が長い分、20 時ぐらいまで働くというスタイルで、お店も日が高いうちは開いています。



<バリアドリード大学の大教室にはそれぞれ著名人などにちなんだ名前が付けられています。この教室は **Japón** (日本) という名ですが、国名が教室名になるのは珍しいそうです。>



<アジア研究所長、商学部長をはじめとした商学部のみなさんと>

ヨーロッパの地方大学の魅力

スペインは言語・文化・食に関する研究をするには面白い場所です。言語も実は多様です。国全体の公用語であるカスティーリャ語（いわゆるスペイン語）に加えて、ガリシア語、バスク語、カタルーニャ語、バレンシア語といった地方の公用語が多数あります。スペインでは、約 800 年間にわたりムスリム国家とキリスト教諸国が同時に存在した歴史があり、カトリック文化とイスラム文化との融合を感じさせる史跡も多くあります。



<食べ歩きは滞在中の楽しみの一つ>

スペインは国家の始まりが連合国家であり、多文化多言語で構成されています。地域独自の文化、言語、食文化を持つのがスペインの魅力です。このことを知らない日本人は多いかもしれません。

グローバル化＝アメリカ化、といわれた時期もありますが、実は国際的な基準の枠組みの中で、アメリカが関与する余地が狭まってきています。私の専門とする会計においては、アメリカは EU が適用している国際財務報告基準 (IFRS) を適用していません。さらに、イギリスの EU 離脱に伴い、英語圏の影響力が弱まっていくことが予想されます。英米圏もいいですが、スペインやドイツなどの非英語圏に着目してみると、新しい発見があるのではないかと感じました。そう感じた滞在でした。

国際交流において、つながりを活かすも活かさないのも自分次第です。継続的な付き合いでしか分からないことが多くあります。長く続けていくことが大事です。今はコロナ禍で対面での交流がままなりません。そろそろ、コロナ後を見据えて動き出していこう。そう思えたレポートになりました。早く対面で皆さんと会いたい。海外に行きたい！書いていて堪らない気持ちになりますね。